

東京大医 ○中澤弥子

【目的】摂食機能の発達およびそれに及ぼす食物のテクスチャーの影響を明らかにすることを目的として、健常乳児20名について縦断的に摂食場面の直接観察を行った。

【方法】1. 対象と調査期間および調査間隔：東京都内の乳児保育所に在園する健常乳児、男児9名、女児11名の計20名を対象とし、保育所で離乳食を開始した月齢（約5カ月）から生後12カ月まで、約2週間間隔で約8カ月間にわたる食事場面の縦断観察調査を行った。

2. 調査項目：摂食機能の発達については、先行研究の食事状況および口唇、舌、下顎などの動きに基づく評価項目を用い、いずれにも該当しない場合は新たに項目を設定した。食物については物性測定の結果を参考に、各離乳段階でのテクスチャーの異なる代表的な「調査食物」を決定し、それぞれの摂食状況について観察した。さらに、食物摂取量、所要時間、歯の萌出状況、体重などについても継続的に調査した。

【結果】対象保育所での離乳食の進め方は、乳児の健康状態、体重、機嫌を基準に157.1日±9.7日（N=19）で開始され、乳児の体調、食べ方、摂取量を参考に進められていた。形のあるもの（例：約1cm角のゆでた大根や人参など）の導入は開始後66.4日±10.2日（N=18）、形のあるものが中心となった月齢は開始後79.2日±12.4日（N=17）、歯茎で食べられるかたさが中心となった月齢は開始後134.4日±11.1日（N=16）であった。形のあるものが導入されると、舌の側方への動きおよび下顎の咀嚼様の動きが認められたが、半固形の食物（例：米がゆなど）では、これらの特徴は明らかではなかった。離乳の各段階で、摂食機能の発達の個人差は著しく、摂取量および所要時間にも違いが認められた。